

少雨に関する農作物管理について

平成23年4月14日
営農支援課

○普通作物

1 早期水稲

現在、田植え・活着期にあるが、用水不足により代かきや田植えが遅れている地域があるため、育苗日数が延び、苗の徒長・老化・病害の発生が懸念される。

また、既に田植えが済み活着期にあるものは、用水不足により活着と分けつの遅れが予想される。さらに、少雨傾向が進むと活着が不十分となったり、低温時に深水対策が実施できない場合は寒害を受けやすくなる。

1) 育苗期から田植え時期にあるものの対策

地域で話し合い計画的な配水により用水の確保に努め、なるべく早く田植えできるよう心掛ける。

(老化苗対策)

①播種後25日を過ぎると肥料切れしてくるので、1箱当たり成分量で0.5g程度の窒素を追肥し、散布後かん水し葉焼けを防ぐ。

※(例) 苗箱1箱あたり硫安3gを0.5ℓの水に溶かして散布。

②寒冷紗等で遮光し、風通しを良くする。また、苗箱の間隔をずらし箱間の通気を良くして温度管理に注意する。

③苗へのかん水は必要最小限に控える。

④育苗期間が長引くと苗イモチが出やすいので、いもち防除農薬を散布する。

(田植え対策)

地域で協議し計画的な配水を行うことにより、代かき・田植えを実施する。

①苗が軟弱徒長(草丈が23cm以上)で、移植作業に支障を来す場合は、第2葉の中央部(地面から15~18cm)で剪葉し植え付ける。

②代かき前には、ほ場内に通水用の溝を作り、短時間に水が回るようにする。

また、畦畔からの漏水を防ぐ。

③寒害の恐れがある場合は、田植えを見合わせる。

2) 活着期から分けつ期にあるものの対策

①分けつ期は、2~3日毎に走り水程度のかん水で間に合わせる。

②除草剤の散布は、用水が十分に確保されるまで見合わせる。

③いもち病の抵抗性が弱くなるので、早期発見に努め防除を徹底する。

(その他)

①育苗日数が40日以上経ち老化・病害により移植に耐えられない場合も想定されるた

め、早めに育苗センター間で連携を取り、苗の手配を組織的に行う。

- ②計画配水、ポンプ揚水などにより、極力用水を確保するが、海水の混入が心配される所では、海水が混入しないように注意する。

2 普通期水稻（飼料用イネ含む）

5月に田植えを行う地域では育苗の時期となるが、今後、用水不足により代かきや田植えの遅れで、育苗日数が延び、苗の徒長・老化・病害の発生が懸念される。

1) 育苗期にあるものの対策

田植えに向けて、早めに地域で話し合い、計画的な配水により用水の確保に努める。

（老化苗対策）

- ①育苗日数が延びることも想定し、播種量は厚播きとしないよう注意する。

- ②苗が伸びやすいため、温度管理は高温としないよう注意する。

（田植え対策）

※早期水稻に同じ。

○野菜

乾燥により生育遅延や草勢の低下、病虫害の多発が予想され、井戸や畑かん施設が整備されている地域では必要最低限のかん水を行う。

1 施設野菜

土壌が乾燥すると水分や肥料の吸収が悪くなり、生育遅延や病害が多発しやすくなるため、かん水を行い、草勢の維持につとめる。

2 露地野菜、かんしょ

1) 植え付け前

土壌が乾燥しているほ場が多く、かんしょでは立ち枯れ病が多発しやすくなる。また、他の露地野菜でも発芽（活着）不良が考えられるので、かん水した後に畦立てするか、マルチングはかん水後速やかに行い、少量のかん水でも効果が出るように管理する。挿苗直後の株元への少量のかん水は活着促進の効果があるので株あたり50cc程度行う。

2) 植え付け後

土壌の乾き具合により週1回10～20mmのかん水を行う。粒や粉状の肥料は水に溶けないと効果が出ないので施肥後にかん水を行う。

*にんじんは急激なかん水により裂開する場合があるので、1回のかん水量（2～3mm）をおさえて、少量多かん水とする。

3 病虫害防除

- 1) 乾燥が続いており、普段は薬害のでない薬剤でも薬害が出やすくなるため、薬剤散布の前日は作物にかん水し、薬害を防止する。

- 2) アブラムシ、ダニ、うどんこ病の多発が予想されるため、発生初期から薬剤散布を徹底する。

○果樹

1 露地果樹全般

現在、露地果樹の発芽期に当たっているが、降水量が少ないことから、発芽揃いが悪かったり、冬季から春季の施肥した肥料養分が土壤中に浸透していない状況が予想される。

かん水が可能な地域においては、全面かん水を行う。

十分な水量が確保できない場合は、肥効を高めるために有効な樹冠下部のかん水を行う。

かん水のできない地域においては、発芽期から緑化期にかけて、通常よりも多めの葉面散布を行い、花、枝、葉の充実を図る。

2 露地かんきつ類

乾燥状態が続くと、露地かんきつ類ではハダニの発生が多くなる。特に本年は新燃岳噴火の影響で冬季のマシン油乳剤を散布できなかった園地があるので、ハダニの発生が多くなることが予想される。発生状況を確認し、早めの防除を実施する。

○花き キク、シキミ等

現在、夏秋ギクの定植から初期生育期であるが、特に露地・雨よけ栽培については高温乾燥により生育不良や開花前進化が懸念される。

また、シキミ等の露地花木等についても乾燥による幼木の生育不良、枯死、害虫の発生等が懸念される。

- 1 用水を確保し、生育に応じたかん水を実施する。用水の確保が難しい場合は、通路に敷きわら等でマルチを行い、土壤水分の蒸発をできるだけ抑える。
- 2 夏秋ギク等は乾燥・高温の影響で開花が前進化することがあるので、気温が高い時間帯は、寒冷紗等の遮光資材を被覆し、頭上散水や循環扇等を利用し、乾燥防止とハウス内気温の低下を図る。
- 3 今春に植え付けたシキミの1年生幼木については、乾燥による枯死が懸念されるので、かん水を実施するとともに、根元に敷きわらを行い土壤の乾燥を避ける。また、乾燥状態が続くとハダニの発生が多くなるので、早期防除を実施する。

○特用作物

(茶)

現在、一番茶の生育期である。少雨により土壤が乾燥しているため、春肥などの効果が低下し、一番茶の生育不良による減収や品質の低下が懸念される。また、乾燥のため、摘採直前にカンザワハダニやコミカンアブラムシ等の害虫の増加が予想される。

- 1 土壤水分不足による肥効低下や新芽生育遅延防止のため、かん水が必要となる。

散水かん水施設のある茶園では、朝又は夕方に25～30mm(8時間程度)の散水を5～7日おきに行う。防霜で散水する時は散水間隔を考慮する。かん水は、少しずつ多数回より一度に多量の方が効果が高い。

施設がない茶園では、防除機等を利用し、3～5 t程度を株元散水し、肥効率アップを図る。

- 2 新改植茶園や幼木園では株元や植え穴への土寄せを実施するとともに、マルチの無い茶園では、敷きわら、敷き草等を実施し、乾燥防止を図り、成園同様に株元へのかん水を20～25mm程度実施する。
- 3 欠株が見られる幼木園では、摘採前までに補植を実施する。一番茶後になる場合は、来春の補植が望ましい。
- 4 一番茶後の中切り茶園では、新芽の生育遅れ、また残葉や枝条部の日焼けを防止するため、成園と同様にかん水し、芽伸び促進を図る。
- 5 乾燥が続くとクワシロカイガラムシやチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の害虫の多発が予想されるため、茶芽の生育ステージと害虫発生状況に対応した適正な防除に努める。

(葉たばこ)

- 1 葉たばこは、移植後30日程度が経過し、根部発達期から最大成長期を迎えている。土壤の乾燥状態が続くと生育は遅れ気味となり、葉の伸びが劣り、葉色は濃くなり、樹型は小型化する傾向にあるためかん水作業が必要となる。
- 2 井戸や畑かん施設が整備されている地域は、必要最低限のかん水を行う。動力噴霧器やAP-1で行うときは、株本に200mlを目安に行う。
- 3 心葉辺りの葉色が濃い場合は、水分不足の兆候であるので用水を確保し、根部発達と養分吸収に支障がないよう管理する。また、土寄せする場合、株元まで土が寄っているか確認する。
- 4 乾燥が続く場合は、アブラムシ、ダニの発生が予想されるため早期防除を実施する。

○その他の注意事項

かん水にあたっては、土地改良区や水利組合等に用水状況を確認して行うとともに、効率的に実施すること。